

2026 年度(令和 8 年度) 第1回 藤沢市ケアラー支援協議会 議事要旨

I.開催概要

- 1 開催日時 2026年(令和8年)6月2日(火)
午前 10 時30分～正午まで
- 2 開催場所 藤沢市役所本庁舎 5 階 5-1・5-2 会議室及びオンライン
- 3 開 会(5 分_10:30～10:35※()内は、目安時間)
 - (1)開会
 - (2)資料等の確認
 - (3)資料及び委員の出席状況確認<資料 1>
 - (4)前回議事録の確認<資料 2>
- 4 議 題(75 分_10:35～11:50)
 - (1)昨年度の協議会について(振り返り)<資料 3>
 - (2)ケアラー支援推進シンポジウムについて(報告)<資料 4-1、4-2、4-3>
 - (3)今年度以降の協議会について
 - ア 情報交換シートから<資料 5>
 - イ 事務局案<資料 6><参考 1>
 - (4)その他
 - ア 今年度の会議開催予定について<資料 7>
 - イ その他<参考 2>
- 5 閉 会(10 分_11:50～12:00)
 - (1)事務連絡
 - (2)閉会

II.会議の概要(議事要旨)

1 開 会

事務局の司会進行のもと、資料確認、参加者の確認を行った。

2 議 題

議題(1)昨年度の協議会について(振り返り)

ア 《資料3について事務局より説明》

議題(2)ケアラー支援推進シンポジウムについて(報告)

ア 《資料 4-1、4-2、4-3 について事務局より説明》

イ 意見交換

【青木会長】

シンポジウム当日に参加した委員から、感想を伺いたい。

【北野委員】

アンケート、パネルディスカッションの中で「情報は光」という記述が頭に残った。一般からの参加者が少ないことを予想していたが、一般からの参加者が多く、藤沢市がシンポジウムをやり続ける意義を感じられるものだった。継続して行く必要があると感じた。

【北野委員】

アウトリーチの確立について、実数のない感覚的な意見になるが、生活困窮の相談を受ける中で、巨人軍の阿部監督の件（AI への相談から児童相談所へ相談を行った）もあった、AI やチャット GPT に聞いたと言う相談者が、ここ半年ほど急増している感覚がある。貸付窓口だと、AI に相談すると藤沢社会福祉協議会で貸してくれる等、孤独・孤立に陥っている相談者が最初に頼るものが AI になってきている。情報到達ルートもシフトチェンジしてきている感覚があり、相談機関だとか、地域の繋がりより、その手前に AI やチャット GPT があるような社会に変化している。社会の変化を意識しながら情報到達ルートを検討していく必要がある。

【青木会長】

AI 活用について、後の議題でも取り上げる。

【大西委員】

高齢者への支援情報の到達は紙媒体、銀行、テレビ等、総務省の資料が出ている。世代によって情報源として欠かせない媒体は違う、そのことを踏まえ、世代別にターゲットを絞って広報を打っていくのも一つの考え方だ。

【青木会長】

届ける対象者がどのように情報を受け取るのか、到達ルートはどうなっているのか。調査手法の確立にも役に立つ視点だ。

【山田委員】

無自覚なケアラーという言葉の重さ、ケアラーという視点以外で第三者と繋がれているケースも多々ある、我々がケアラーだ、ケアラーではないと決めつける怖さを強く感じている、自覚が無いケアラーがいてもいいと考える、当事者からすると自覚しなければいけないのか、重みを感じる表現だ。

【青木会長】

大切な視点だ、端的に表現する時に、より適した表現を模索していく。

【大西委員】

ケアラーという言葉がどうなのかということもある、ケア自体は悪いことではな

い。誰もが行っている崇高な行為だ、誰もが生まれてから何かしらのケアを行い、ケアを受けている。国のヤングケアラーの定義で、過度なケアをしている。過度をどう捉えるのか、結論は出ない。客観的に見て、大変であろう、というケアをされているというようなところなのか。

【青木会長】

こども家庭庁が出しているヤングケアラーの定義で、過度なケアを行っているという項目がある。過度であるか無いかで支援を行うか否かの決定はしない。当事者の暮らし、権利、何の支障があるというところの見極め、当事者が何を求めるのか、客観的に見て、これは見過ごせないといったもの、形のないものを形にする。

【和田委員】

よく聞くのは、知らない間に負担が増えているという状況。個人の許容範囲であれば生活の一部であり、生きがいになりうる。負担が増えすぎてしまうと、自分の生き方ができなくなる。わかりやすく伝わる言葉を模索する。

【青木会長】

ケアラーという言葉があることで、同じような状態を共有して語れることもある。福祉用語ではないスタイルを模索する。

【中澤委員】

自分自身がケアラーかという自覚がなく、突然障がいや、病気になってしまった子どもを見るのは、当たり前をやってきたことだ、それにケアラーという名前がついた、無自覚という言葉も、そう表さなければいけないんだと感じる、過度と言う言葉も愛情であったり、諦観であったり、短い言葉で表すことの難しさを感じている。

【山田委員】

無自覚なケアラーについて、障がいのある親子との意見交換をしたことがある。「弟の面倒を見る兄を偉い」と、地域社会が無邪気な状態で当事者たちを無自覚なケアラーにしてしまっている、もしくは当てはめてしまっている。その視点も持ちながら、この言葉に向き合う必要がある。

【青木会長】

「偉い」などの状態を縛る言葉を選ぶよりは、表現を変え、時には注意をして、言葉の選択をする必要がある。

【樺山委員】

届かない声を拾うためのアプローチについて、届かないとは、支援を求めているが、その声が届かないという理解と、受け止めをしている。「無自覚な」という言葉も曖昧だと感じている、無自覚だが支援を求めている人と支援を求めている人、細分化すると、おそらくいろいろな層が存在する。話し合いの場では、しっかりと細分化してラベリングすることで、共通言語として進みやすいということも

ある。ケアが必要な場面は多々あり、自分らしいケアの在り方、「やりたい」を叶える自分らしい生活を実現するためのアプローチとしてとても良い。

【青木会長】

届かない声自体に私たちはアプローチしている。「やりたい」を叶えるといった方向に向かっていくのなら、そういう声を拾っていけるように対応していく。

【中澤委員】

いろいろな中で、「あなたも頑張らなければいけない」と言う声があり、子どもにとっても、「自分が頑張らなければいけない」ということがある。それは子どもにとってとても重荷になる。ケアラーということがわからないのに、頑張らなければいけない。押しつぶされるようなことがあってはいけない。周囲の人に「言わないで」というのも難しいことだ。日々の生活の中で、私達も含めてそういうことを、気を付けていかねばいけないと実感している。

【青木会長】

広報・普及のところで、当事者が、自分がおかれている状況を、どう理解して外に発信するかという話だ。その周りの人にも広報を普及しなくてはならない。ケアラーとの決めつけは、当事者の発信を阻害するおそれがあり、ケアラーでありたいと思う、自己実現に押し込めていくロジックでもある。

【伊草委員】

ケアラズカフェとあるが、これは認知症カフェとは別のものなのか。

【青木会長】

現段階では一つのアイデアであり、ピアグループを指す用語だと思ってもらいたい。

【伊草委員】

藤沢市で認知症カフェの数はとても多く、包括や病院が運営しているところもある。地域の人が利用しやすいケアラズカフェは、早く実験的に実施していくのが望ましい。

【青木会長】

実験的に実施とは、もっと具体的に教えて欲しい。

【伊草委員】

どういった目的で行うか、幅広くケアラーの人に来てもらって相談するのか、もう少し具体的な困りごとの相談が必要であり、その捉え方だと思う、市のほうでどういった説明を考えているのか知りたい。

【事務局】

昨年度も試みたところ上手く運用できておらず、過去の失敗も含めて、当然継続して働きかけは行っていきたい。ご意見いただく中で、どういった方々にどういった情報を届けていけるのか、計画的に行っていないと、利用者は集められない。事務局としては地域の情報を集め、周知をし、場を活用してもらうこと、良い

ものを集め工夫して展開していくことが、今後必要になってくると考えている。

【伊草委員】

地域の取組になると、包括の取組が多いのだが、やはりケアラズカフェも藤沢近隣の地域の住民へ向けて、包括が中心となって行ってみて、利用者がどこから来ているのかを把握することが必要ではないか。地域のネットワークで必要とされ生まれたものは大事だ。行政が主導で始める場合、人が集まりにくいとも聞いている。包括のように、今あるものを大切に継続できるよう、後方支援をどの程度していくか、「ここに地域の拠点があって、定期的にやっていますよ」であるとか、「相談中心ですよ」などの細やかな周知を、行政と地域でやれるとよい。オンラインの活動は、当事者が知る機会になり、そういった活動をすることで、地域が関心を持てば、知識をもつ機会になる。すでに活動しているものを、どれだけ大事にするか、そう言った様々なものをどう動かすのか、ベースになるのは、やはり実態の調査だ。

議題(3)今年度以降の協議会について

ア 《情報交換シートから＜資料5＞を基に事務局が説明》

イ 事務局案＜資料6＞＜参考1＞

質疑応答

【深見委員】

支援の計画ができ、ケアラー支援がもう少し浸透してからの調査を提案する。今だと回答が偏ってしまい、広い意見が取れにくい状況にあると推測する。

【青木会長】

準備に関して、誰が行うのか。

【長岡委員】

時期的なところと合わせて、普段ケアマネージャーとして支える側の家族と会うことが多い、家族はケア側であることが多く、奥さんをご主人がケアしていて、ご主人も高齢で、息子がいずれビジネスケアラーになるのだろうと予測される。実態調査を行った場合、ケアラーの幅を広げていかなければならない。調査までの時間は必要になる。

【青木会長】

家族で支えあっている方々にも答えていただきたいが、どうやってどこに情報を届けるのかという課題がある。十数年前の調査では、特別支援学校を含めた市内学校の教員全員に調査を依頼した。これを全市民に行うとなると予算的にも時間的にも現実的ではない。ケアラーという言葉があり、状態の細分化をしてきているが、それでもそこから漏れる人がある。知恵を出し合い、調査の詳細を決めなければならない。それには時間がかかる。

【大川委員】

学校の現場だと教員も同じく、私生活で親や子どもの介護をしていることもある。虐待が社会に認知されるようになり、児童相談所では職員の数が足りないくらい年々うなぎ上りに通告が増えている。虐待は子どもの命に係わることなので認知度は高くなる。ケアラーも、幼稚園や小学校の子どもたちはどのように訴えればよいのか。広く周知してもらう必要がある。

【青木会長】

調査対象選びも難しい、調査内容も精査しなければならない。調査対象も来年を見据えて選ばなければならない。

【小嶋委員】

調査とはケアラーを掘り起こすことなのか、潜在的なケアラーが見つかったとして、その場で手を差し伸べることができるのか、ケアラーの線引きが難しい。実際に掘り起こしができたとして、何ができるのか。そこまで考えていかなければならない。

【青木会長】

実際の調査において、無記名で自由記入だと、緊急性のある記載内容であっても、対応ができない。記名することになると協力を得ることが難しい。調査の大切さは理解しているが、調査内容の選定は難しい。

【北野委員】

調査による回答内容は重要だ。ケアラーという言葉、この計画が目的にしていることは、地域に浸透しているとは言い難い。基盤作りが重要であると考えながら、調査をすること自体が、周知や啓発、普及にも繋がっていくと考えられる。周知と浸透を行うことを明確なメッセージとして調査を行っていくことが、地域の基盤作りに繋がっていく。

【青木会長】

調査前文、鑑文、あるいは説明文に目的を明確に明記するか検討する。しかし目的によって協力が得られないこともある。

【松本委員】

ケアラーという言葉自体、浸透ができていない。50代・60代の友人も介護で大変な思いをしている。本人たちは自身がケアラーだと考えておらず、仕事を辞め、自宅で入浴介助等を含めた介護を行っている。介護についての切実な思いは友人には言えるが、気軽に思いを吐き出す場所がない。井戸端会議的に話ができる、ケアラズカフェの話を実現してほしいと考える。近隣の高齢者施設が、民生委員や地域の協議体が協力した、カフェを運営しているが、利用者は高齢者が多い。ケアラー自身が参加している訳ではない。まずは浸透させていくのが、いいのではないか。

【青木会長】

ケアラーという言葉自体が浸透していない。かつて介護者、子育て期、ダブルケアで介護と子育ての方、誰かのお世話をしているなど包括した言葉が無かった。ヤングケラーという言葉が出てきた時にケアラーという言葉が出てきたと感じている。ケアラースカフェはとても大切に、調査を行う時にそこに集まれる人を対象に協力願うことでケアラーの総体も取れる。今後集約しておく必要を感じている。

【青木会長】

議題 3 の承認をいただいた。

議題(4)その他

ア《会議開催予定について〈資料 7〉を元に事務局より説明》

質疑応答⇒委員より質疑無し

【青木会長】

議題について承認をいただいた。

イ《その他〈参考 2〉を元に中澤委員が解説》

意見交換⇒特になし

3 閉会

(1)事務連絡

【事務局】

事務連絡。次回会議について 2026 年 8 月 4 日 火曜日 午前 10 時 30 分から正午まで。本庁舎 8 階 8-1・8-2 会議室及びオンラインで開催を予定。

(2)地域福祉推進課横田課長のもと、閉会。

以 上